

スポーツ義足製作の第一人者、臼井二美男さんに聞く

義足を創る、 という仕事。

足を失った人にとって、義足は新たな足、身体の一部である。
その中に、スポーツをすることに特化した義足がある。
スポーツ義足製作の第一人者・臼井二美男さんに「義足を創る」
という仕事についてうかがった。



A WAY OF LIFE



WEB

東京身体障害者福祉センター
<http://www.normanet.ne.jp/~limfitce/>

財団法人鉄道弘済会
「東京身体障害者福祉センター」
東京都新宿区北新宿3-27-2

鉄道の車両を連結するときに手足を挟まれる事故が多かったことから1969年に東京・新宿に発足。民間における日本で唯一の、義肢製作から装着訓練までの一貫したサービスを受けることができる施設である。義肢の製作や修理だけでなく、装着訓練、機能回復訓練も行っている。入所設備を完備しているので、地方在住者でも利用が可能。



A WAY OF LIFE

義足を創る、という仕事。

義肢研究員・義肢装具士 | 臼井二美男さん

足を失った人が最初の勇気を出せるようになるまで支援

「事故や病気で足を失った人にとっては、まずはその現実を受け止めて、前向きになれるまでが大変なのね。スポーツをしたい、スポーツ義足が欲しい、と思えるのは、かなり時間が経ってから。最初は一般的な義足で普通に歩くのさえ難しく、気持ちもスポーツにまでいかないから」

開口一番、義肢装具士の臼井さんは淡々と語り始めた。

「僕がスポーツをすすめているのは、スポーツをやっていると、性格が変わるから。足がないことを隠す気持ちが薄れて、仲間とさらけ出せるようになる。これって、大切なことなのね。義足の人だけの陸上チームを作っているんだけど、とにかく記録なんていっから、練習に出ておいでって誘うわけ。最初はそういう気持ちにもならないのがわかってるから。練習の後にごはんを一緒に食べるだけでも気持ちが違う」

臼井さんが勤務する東京身体障害者福祉センターでは、ある程度走れるようになるまでが義肢装具士の受け持ちだそうである。その間のメンタルな部分も含め、サポートをしていく。失われた機能は義肢でカバーできるが、気持ちの部分（とくに失った直後）はそうもいかない。そこでスポーツなのである。

最近では義足を使用している障害者の5%ぐらいが、スポーツ義足も使っていて、その数は年々増加の傾向にあるそうだ。「義足をつけて働くだけではなく、レクリエーションをやりたいという希望が多い。いい傾向だと思ってますよ」と臼井さん。年間に80人ほどの義足を創り、大きい修理を含めると100人分ぐらいになるという。

「義足が痛かったり、かっこ悪かったら、気が滅入ってしまって次のステップまでいかないでしょう?」

「機能もおしゃれ心もきちんと大切にする。記録に挑戦したい人には応える。それがスポーツ義足であっても一般の義足であっても、とにかく義足の人の勇気と元気につながればいい」

たくさんの記録を生み出した義足の臼井さんの口から発せられた、重みのある言葉であった。

一般的な義足とスポーツ義足の違いは、

前者が日常生活を送る上で元の形態や機能を補って、代替する（だから靴も履けるようになってい）のに対し、スポーツ義足はスポーツすることに特化した競技中に使用する義足で、むき出しのまま使用する。臼井さんが手にしているのがスポーツ義足（写真A）（走り高跳び用）である。



写真A

スポーツに徹した跳ぶ足、走る足

臼井さんがこれまでで一番印象に残った義足を聞くと「シドニーのパラリンピックに出た走り高跳びの鈴木徹さん」という。事故から数ヶ月後の義足による歩行訓練から担当したのだが、筑波大学の体育専門学群の学生だった鈴木さんは、通常走れるまでには数年かかるところを、事故から1年後には走り出し、それからすぐに走り高跳びの日本記録を大きく更新したのだ。

後は鈴木さんと臼井さんの二人三脚。新しい素材による板バネのスポーツ義足創り、それによるトレーニング、調整、作り直しの繰り返しだったという。この話は義足着用者に語り継がれ、板バネの義足で跳ぶ鈴木さんの姿は、多くの人に感動と勇気を与えることとなった。

義足の人の中には、障害者のスポーツ大会ではなく、健常者の大会に出場しているケースも少なくない。トライアスロンはとくに有名である。今年初めて両足とも義足のアスリートが出場した。この義足も臼井さんが担当した。義足をつけたまま泳ぐ必要があり、さまざまな工夫を施している。

跳ぶ、走る、泳ぐ。それぞれのスポーツに適した義足がある。しかも、ひとつひとつ条件が異なる。しかし、製作のゴールは「その義足をつけて元気になってくれること」。これに他ならない。

義肢に国境はない。いいとこ取りで使う

臼井さんの机の上に、金魚の柄の義足がのっていた。「今日、大分県からこれを受け取りに来てから」と、義足を手に、廊下で待っていた

「どの部分で切断したか、それから何をしたいかとか、予算などによって選択肢がいろいろあります」。最近ではインターネットで調べて地方から来てくれる若い人が多いとのこと。「高齢者がインターネットでここを知って来てくれたのだけど、その人の場合は、お孫さんが探してくれたと言ってました」。

PROFILE

臼井二美男さん | うすいふみお

1955年群馬県生まれ。義肢研究員、義肢装具士。大学中退後、今でいうところのフリーターとなる。公共職業安定所（現ハローワーク）を訪れた際に義肢装具を創る仕事があることを知り、この道に入る。以来、1700以上もの義足を製作。とくにスポーツ義足の分野ではパラリンピックで活躍するアスリート達の義足を多く手掛けることで知られる。2004年のアテネ大会では、日本選手団メカニック担当として同行した。



ずらり並んだ義足。それは日本の義肢の歴史でもある。中にはスポーツで記録を樹立した義足や義手も展示されている。



若手の義肢装具士に相談をもちかけられることも少なくない。頼りがいのある先輩だ。この日は試歩行したがどうしてもうまく歩けないという義足を手に、臼井さんは自身の足で仕組みを教え、アドバイスをしていた。

“事故や病気で足を失った人にとっては、 まずはその現実を受け止めて、 前向きになれるまでが大変なのね。”

小野洋一さんのところへ向かった。

走り高跳びの鈴木さんが実際にオリンピックで使用した板バネの義足を、臼井さんは小野さんに差し出した。「これ、鈴木さんが使った義足」すると小野さんは「すごいなあ、実際にこれで跳んだんでしょ？ 僕もこういうの使ってみたいなあ。走れるようになるかなあ」とつぶやいた。

「今度の義足なら走れるから、ね。金魚の布もよかったよ」

聞けば、金魚の柄は布持ち込みでカスタマイズしたものとのこと。早速、フィッティングに入る。細かくチェックして微調整後、廊下を何度も試歩行した。

「やっぱり全然違うなあ。フィット感がすごくいい。歩くのが楽しくなりそう」と小野さんは感触を語った。

ちなみに、この義足は、日本・ドイツ・イerlandで製造されたパーツを組み合わせて製作されている。

「いいとこ取りしてるの。義肢に国境なんてないからね。すぐれた義足を創りたい、だから組み合わせる。ただそれだけ」

両者が納得のいくまで微調整をし、歩行のクセなども把握した上で、歩き方のアドバイスもする。すっかり自分の足になっている感じが大切なのだそうだ。

「走れば、どんなスポーツだってやれるよ。走るのは基本だもの」

臼井さんはさらりと言っているが、その言葉のひとつひとつが義足を使う人を励ましている。だから、その言葉は受け手にとって重い意味をもつ。

これからはリアルコスメチック 義足にも力を注ぎたい

技術の発達によって、義肢の分野も大きく変わろうとしている。これまでは一般の義足とスポーツ義足があったが、一般の義足がさらに進化し、質感や機能がより人間の足に近づいた義足が登場したのである。それを「リアルコスメチック義足」と呼んでいる。

イラストレーターの須川まきこさんは、大阪からやってきた。

「大阪でお願いしたときに、薄いシルクのワンピースを着たいからと言っても、義足を創ってくれる人にはなかなか伝わらないんですよ。私の場合は大腿義足なので、腰につける装具が

大げさだと、スカートが膨らんでしまうんです。

それって、イヤじゃないですか」

それがきっかけで、須川さんがリアルコスメチック義足をこのセンターに依頼したという。「これはリアルコスメの中でもっともいい義足で、足部（いわゆる靴を履く部分）の角度が無段階で調節できるようになっているもの。だから、パンプスも履けます」と臼井さん。

「ストッキングをはいてしまうと、自分の足と見分けがつかないくらいでしょう?」と、須川さんがスカートをたくし上げて見せてくれた。見分けがつかない。その秘密は自由に曲がる膝にあった。膝が飛び出ないので、機能的にも実際のお膝に近づいているのである。

「僕は、スポーツ義足にこだわらなくてもいいと思ってるの。その人が前向きな気持ちになれるのなら、なんだっていい。須川さんはとてもおしゃやかな人だから、それをがまんするのはよくないことでしょうか? 装具を隠したいという気持ちよりも、これまでと同じ様におしゃれをしたいという気持ちなのね。義肢の質もどんどん向上してきて、スーパーリアルなのが可能になってきた。今はスポーツ義足が目目されているけれど、これからは、リアルコスメチック義足にも力を入れていきたい」と臼井さんは言う。

義肢装具士になるには養成校(3年)を卒業後、国家試験を受けなければならない。これまで養成校は5校(国立1校、私立4校)、卒業する学生は年間わずか110人しかいなかった。ここにきて新設され、3校(うち、大学に科を新設が1校)が増加した。

どんどん高度な技術が求められていて、先端テクノロジーとも密接な関わりをもっている。しかしその一方で、義足を創るという仕事は、義足を求めている人と義肢装具士のコミュニケーションが重要である。何を求めているのか、選択肢は何か、創ったものの調整から修理、すべてコミュニケーションの中から答えを見つけていく必要があるからだ。卒業生は義肢装具製作施設、国公立施設、病院、リハビリテーションセンターに勤務するが、発展途上国での人材も不足しており、今後の活躍が期待されている。



できあがってきたマイ義足と対面。小野さんは大分から車でやってきた。調整をして金具を固定させる。これが終わればよいよ試歩行。このタイプはまずボルトのついたソックス状のものを切断部にはき、そのあとソケットのついた義足をはめて、これが先の金具と一体化する仕組み。ボタンを押さなければ外れないので、きわめてフィット感がよいとされる。



「もういっぺん歩いてみて」。微調整しながら、歩く、確かめる、また微調整。これを繰り返すこと数回。どんどんフィットしていく義足。小野さんの顔に笑みが。



「適度な重さも硬さもあって、自然。オシャレもできちゃいます。出会えてよかったという感じです」と須川さん。自身の繊細なペン画によるイラスト集「Lace Queen」(レースクイーン)にも義肢の女性が登場している。